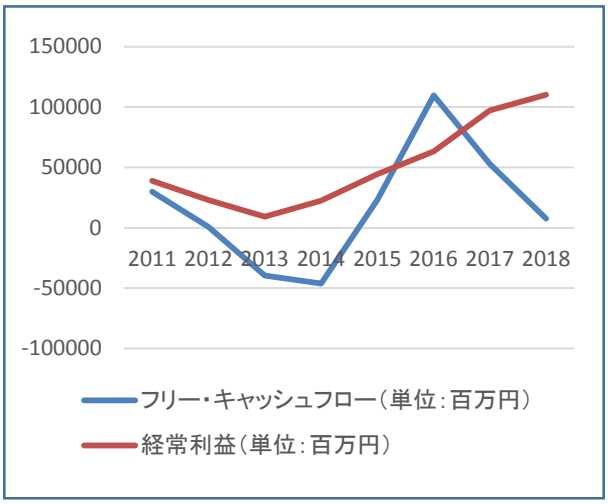
YNUの研究力 file No.16

会計制度をデザインする

会計情報をさらに役立つものにするためにはどうすればよいか？

横浜国立大学 大学院国際社会科学研究院
准教授
木村　晃久

1. 利益って何だ？



上のグラフは、ある実在する企業の経常利益とフリー・キャッシュフローの時系列推移を示したものである。

企業の業績を示す数値と言われて、真っ先に頭に浮かぶのは「利益」という言葉だろう。では、企業が100億円の利益を獲得したと発表したとき、その企業には100億円の資金が流入したのだろうか？

答えは「NO」である。実は、利益というのは資金の流れを「加工」して創り出される実体のないものであり、その加工方法は会計制度によって決められている。

では、なぜ資金の流れをわざわざ加工する必要があるのだろうか？その理由は、資金の流れが「でこぼこ」過ぎて、そのままでは企業の「稼ぐ力」を上手く示すことができないからだ。誤解を恐れず言えば、資金の流れのでこぼこを抑える（これを「平準化」と言ったりする。）ことで企業の業績（稼ぐ力）を表現したものが、利益というもののおおざっぱなイメージである。

2. 経営者は利益数値を調整できる

問題

木村商店は文房具の小売業を営んでいる。当期の取引は以下のとおりであった。

① ボールペン1本を50円で仕入れた。
② ①と同じ型のボールペンをもう1本、60円で仕入れた。
③ 上で仕入れたボールペンのうち、1本を100円で販売した。

当期の利益はいくらになるか？（残りの1本は在庫として保有しているものとする。）

さて、ここで左に示した問題を考えてみよう。先に仕入れたものを売ったと考えれば利益は50円、後に仕入れたものを売ったと考えれば40円、平均仕入単価は55円だと考えれば45円。どれが正解だろうか？

実は、上の答えのうち、50円と45円は正解、40円も今から15年前の日本であれば正解である。ここから、会計制度では利益を計算する方法（資金の流れを「加工」する方法）がひとつに縛られていないこと、会計制度は変化すること、そして、企業の経営者は会計制度で認められている範囲内で利益を調整できることがわかるだろう。

※ルール違反は「不正」なので許されない。

3. 狐(投資家)と狸(経営者)の化かし合い？

　会計情報はその企業の価値を評価したい投資家にとって欠かせないものである。経営者は投資家が会計情報を利用することを知っているから、時にはルールを「悪用」して利益を調整し、高い評価を受けようとする。投資家もそのことを知っているから、怪しい利益情報は割り引いて評価する。そのことを知っている経営者は、割引評価を受けないような「シグナル」を送るために利益を調整する。そのことを知っている投資家は…

　このように、経営者と投資家は利益情報を介して「ゲーム」を繰り広げている。このゲームが双方にとってコストの大きい不毛なものにならないようにするためには、会計制度を上手にデザインすることが必要で、私は、このゲームの現状を大規模データを利用した統計分析によって明らかにしようとしている。この分析により、投資家がさまざまなタイプの利益調整の存在を見越したうえで意思決定を行っていることが分かってきている。今後はこのゲームがもたらす社会的なコストとベネフィットの大きさに着目した研究を行うことで、会計制度のあるべき姿を探求していきたい。

この研究に取り組んでいるのは

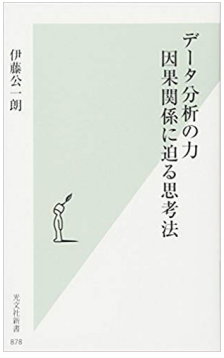
木村　晃久 (きむら　あきひさ)

横浜国立大学 経営学部／大学院 国際社会科学研究院 准教授
東京大学 大学院経済学研究科 博士課程単位取得。
博士（経済学、東京大学）。埼玉学園大学専任講師を経て現職。
大学時代にスポンサー契約をしていた趣味のテニスはセミプロ級。

本棚
参考図書のご紹介

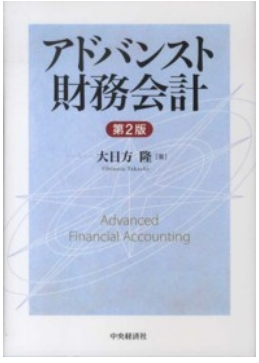
高校生向け書籍

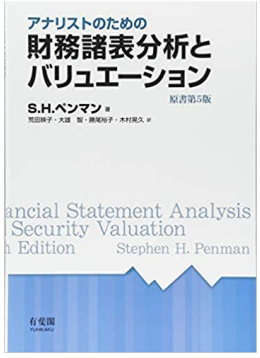
「はじめて出会う会計学（新版）」（有斐閣アルマ, 2015, 川本淳ほか）
「データ分析の力」（光文社新書, 2017, 伊藤公一朗）
「高校生からのゲーム理論」（ちくまプリマー文庫, 2010, 松井彰彦）

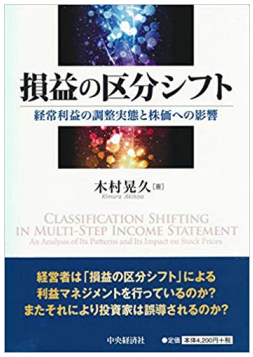


より詳しく知りたい人は（専門向け）

「アドバンスト財務会計（第2版）」（中央経済社, 2013, 大日方隆）
「アナリストのための財務諸表分析とバリュエーション（原著第5版）」（有斐閣, 2018, 【著】S.H.ペンマン, 【訳】荒田映子ほか）





最近の論文（研究書, 単著）

「損益の区分シフト：経常利益の調整実態と株価への影響」（中央経済社, 2019）